

巻頭言

Cover Story

新入生のみなさんのご入学、在校生諸君の進級、おめでとうございます。新入生を含む本校生徒の多くは、面接で志望理由を問われ、「豊かな自然環境の中で落ち着いて勉学に取り組めるからです」と元気よく答えたとはず。その責任を取っていただく目的も含め、2002年に創刊されたのが本誌です。

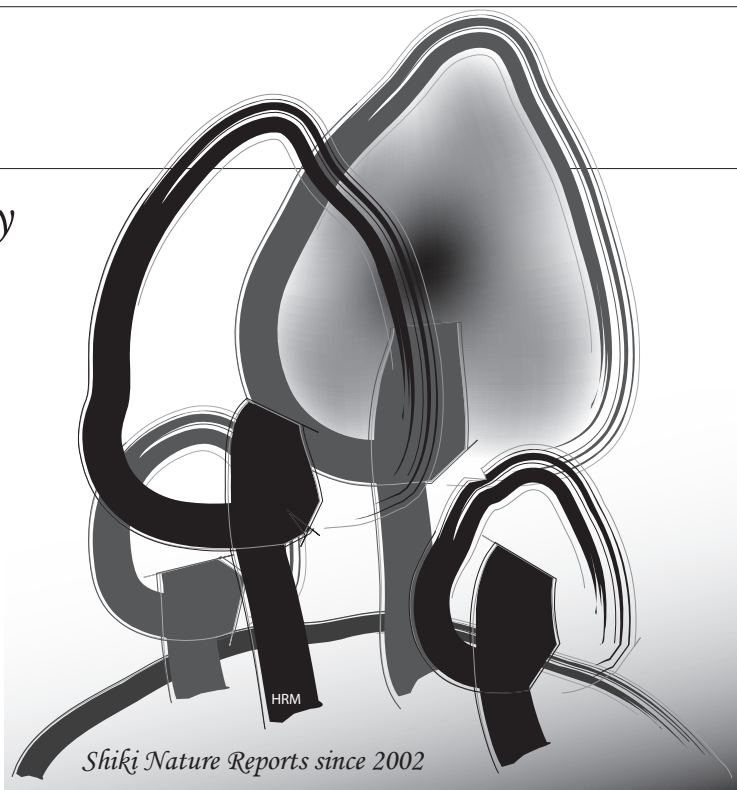
本校の森を見わたした時、漠然と「緑が多い学校」という印象しか湧かないひとと、「クヌギが雄花をつけている。キランソウもそろそろ咲きそうだ」という目で、複雑な世界をそのまま見ているひとでは、どちらが豊かな人生を送りそうでしょうか。

福澤先生は、この複雑な世界の理(ことわり=因果関係)を解き明かして、その答えを導き出す考え方をサイエンス(=実学)と言うのだとおっしゃっています(サイエンスを「科学」という意味で使っていませんでした)。ぜひ、自ら答えを導き出せるようになっていけることを祈ります。

新棟「光彩館」の前には「ハナモモ」が記念植樹されています。モモの観賞用品種の一つである「源氏」は、卒業・入学と慶事が続くこの季節に紅白の花を咲かせます。生徒諸君の門出を祝うために選ばれました。これからも多くの生徒たちを祝福し続けるでしょう。

あらためて、入学・進級おめでとうございます。

(Miyahashi)



【お香と植物④】 東洋のお香にも、西洋の香水にも使われる藿香

Incense

日本では古くからお香を焚く文化があり、お香の原料には中国や東南アジアで採れる植物を乾燥させて使います。一方、西洋では香水文化が発達しましたが、香水には植物から抽出した高濃度の精油を用います。今回紹介する「藿香(かっこう)」というお香の香料は、パチュリ(パチョリ)という名で香水の世界でも親しまれています。

藿香はシソ科の多年草で、インドネシア、フィリピン、中国などで採れます。私はお香を習いたての頃、藿香の香りを覚える際に「スペイン料理のパエリアを思い出す香り」とメモしました。パエリアにはサフランなどのスパイスが用いられますが、私は藿香のことをそれらのスパイスに似た爽やかな香りと認識したのでした。

藿香は、お香の世界では軽やかで優しい香りとして扱われますが、香水の世界では「湿った土のよう」「深く落ち着いた香り」などと表現され、真逆の印象です。何故かという、乾燥させたものを用いるお香と精油を用いる香水で香りに差があるから。そしてお香の世界では、藿香よりもさらに深く重い香りの香料がたくさんあるため、藿香は相対的に軽い香りと言われるからです。洋の東西を問わず、香りの世界には欠かせない藿香。あなたはどんな風を感じるでしょうか？



パチュリ(シソ科)

(Inoura)

志木高には百葉箱がグラウンドの隅、ソフトテニスのコートの脇にあります。百葉箱の横からタコのように足が伸びた(実際にはケーブルです)先にはCampbell Weather Stationという自動気象観測装置があります。2020年の夏に設置し、気温や降水量、湿度、風向・風速、気圧、日射量、落雷、さらには地中の温度(深さ0.5m、1.0m、1.5m)の各種データを10分ごと自動的に記録しています。

図は校内の一年間の気温変化です。計測は10分毎に記録されていて1日に144回記録されます。144回の平均値を日平均気温として一年の変化をプロットしました。一年を通しての変化が必ずしも一様ではなく、急に暖かくなったり、寒くなったりしながら、季節変化していることがわかります。



(Higuchi)

「茶室だより」 No.01 桜の季節と茶室の誕生と

Japanese-culture

この桜の季節に、本校初の本格的な茶室の運用が始まりました。光彩館1階の奥、テニスコート側にある「和室」がそれです。入口・^{ふみこみ}踏込の先に八畳広間席が2席と、^{ひろえん}広縁・^{みずや}水屋(=茶道具の準備・片付け場所)・^{きやま}鞘の間があり、バックヤードには台所・道具入・講師室も備えています(詳細はまたの機会に)。今年度は新築の香りのなか、3年生自由選択科目「社会C」の履修者計39名の諸君がここで裏千家茶道に触れる予定で、去る12日・15日には、去来舎和室などから茶道具の引越作業を行いました(履修者諸君、お手伝いありがとう!)。このあと、彼らはお辞儀のしかたや襖の開閉などの「^{たち}立ち居振る舞い」を手始めに、^{てまえ}点前(=茶を^た点てる作法)を分解した「^{わりげいこ}割稽古」を経て、徐々に茶の湯の世界に足を踏み入れることになります。

ところで、茶の湯の世界では季節感が大切にされます。今年は桜の開花が遅く、まだ校内で桜が残っていたこともあって、茶室での初回授業では、桜に因む道具「茶碗・^{なつめ}棗(=抹茶を入れる容器の一つ)」を取り合わせました。なかでも筆者が特に好きなのは棗。黒漆で塗られた、一見すると何の変哲もない黒一色の棗なのですが、よく見ると、光の具合で、同じ黒漆で描かれた桜がほのかに浮かび上がる趣向になっています。名付けて「夜桜棗」。この奥ゆかしさ、たまりませんね。先人は粋な仕事をするものです(実物を鑑賞したい諸君は筆者まで)。



和室 (奥)



和室 (今月の床の間)

(Ikeda)

高校に入学して、通学時間が長くなり、同時に行動範囲が広がった人も多いだろう。せっかくなので、学校周辺や通学途中で面白い場所がないか探してみてほしい。私自身がよく立ち寄ったのは本屋（古本屋）とCDショップだが、ここで薦めたいのは、もちろん美術館・博物館である。残念ながら志木駅周辺にはないが、都心まで出なくても、東上線の成増駅からバスで10分のところに板橋区立美術館が、西武池袋線の中村橋駅から3分歩くと練馬区立美術館がある。どちらもあまり大きくはないが、しばしば日本美術の面白い展覧会が開催される、オススメの美術館だ。

練馬区立美術館でいま開催中なのは、近代の日本画家、池上秀畝（いけがみしゅうほ）（1874-1944）の展覧会（4月21日まで）。残念ながらもう会期末だが、5月には出身地である長野の県立美術館に巡回する（5月25日～6月30日）。秀畝は伝統的な花鳥画を多く描いた画家で、特に鳥の絵を得意とした。気になったのは、1928年に描かれた、チラシ（左下）のメインビジュアルにもなっている絵。一見孔雀のようだが、よく見るとその羽根は孔雀とは少し違っている。実はこれは青鸞、それも東南アジアに棲むカンムリセイランという鳥らしい。秀畝が日本でよく描かれた孔雀ではなく、この珍しい鳥を描いたのはなぜか。



謎を解く鍵は絵の来歴にある。この絵は、いま三田キャンパスのすぐ近くにあるオーストラリア大使館が所有しているが、もとはその地にあった旧徳島藩主・蜂須賀侯爵邸の客間に描かれたものである。そして、蜂須賀家第18代当主・蜂須賀正氏（1903-1953）は鳥類学者。ケンブリッジ大学に提出した卒業論文で、中国の伝説上の霊鳥・鳳凰のモデルがカンムリセイランであることを論じている。では、鳥に詳しい鳥類学者が、単に珍しい鳥を描かせただけなのか。美術の伝統から考えると、徳の高い君主の治世に現れるという鳳凰は、大名家の邸宅に相応しい画題である。とすれば、蜂須賀家が求めたのは、時代になかった、より「リアル」な鳳凰の絵だったのかも知れない。

春は展覧会の季節である。上野の大きな博物館に行くのももちろん良いのだが、自宅や学校の近くにあらためて目を向けると、意外な出会いがあるかも知れない。

(Hara)

春の句

今年は本校生徒が詠んだ句を掲載します。

HAIKU

春眠を貪る朝の武蔵野線
風に乗り手のひらに散る落花かな
さえずりや重いまぶたに子守唄
新学期祝う桜のクラッカー
囀りに耳傾ける暇なく
恵風にふんわり揺れる花筏
水面に一羽のかもと花筏
花の昼靄の中に箱ティッシュ
加速する心音隠せ花吹雪
木漏れ日を浴びて小躍り諸葛菜

升湯大夢
根城侑史
高屋柊真
土田翔太
西澤真太郎
池田歳
坪井拓磨
雑賀蒼太郎
中村圭希
安部航平

(Maekita)

ちょうどこの時期の牧童周辺の芝生の中に紫色の花が地をほうように咲く。名前をキランソウという。しそ科の野草で、葉や花が地をほうように放射状に広がる(=円形になる、すなわち「ロゼット」)様子から、「地獄釜蓋」と呼ばれることもある。この植物、別名「医者いらず」、「医者泣かせ」と呼ばれるほど、薬効が高い。鎮咳、去痰、解熱、止瀉薬として、つまり風邪薬として用いられてきた。植物体のどの部分も薬になるが、生もしくは日干しにしたものを煎じて服用するのが一般的であった。なお、ブドウ球菌などの抑制作用もあるので、外傷にも効果がある。

【参考】原色牧野和漢薬草大図鑑（北隆館）

[2024年1月～2024年4月までの開花情報]

Grass

19.Feb.2024

タネツケバナ, カントウタンポポ, ショカツサイ

28.Feb.2024

アメリカアゼナ, ヤエムグラ, ハルジオン

10.Mar.2024

カヤツリグサ, カラスノエンドウ, ハナニラ

18.Mar.2024

キュウリグサ, ムラサキサギゴケ, タチツボスミレ, ムラサキケマン, オランダガラシ

25.Mar.2024

キランソウ, カラシナ, スギナ(ツクシ)

2.Apr.2024

ヘビイチゴ,カタクリ

10.Apr.2024

ヤブニンジン, フデリンドウ, イヌムギ, ヤブタバコ, ニオイスマレ

16.Apr.2024

ノミソツリ, クサフジ, オオアマナ, ヤブジラミ, シバクサ, シロツメクサ, ツボミオオバコ



【 ハナモモ 】 バラ科モモ属

Wood

【2/28】カンヒザクラ

【4/2】コブシ

【4/2】クスギ

【2/19】カワヅザクラ

【3/25】ソメイヨシノ

【4/10】オオムラサキツツジ

【3/21】アンズ
*2023年2月移植

【4/2】アオダモ

【4/16】ハナミズキ

【3/18】ユキヤナギ

【4/10】トウカエデ

【3/21】イヌシデ

【4/2】ドウダンツツジ

【3/25】イロハモミジ

【3/25】ヒサカキ

【4/10】イチヨウ

【2/19】アセビ

【3/21】レンギョウ

【4/9】ケヤキ

【4/10】シキミ

【3/14】ハナモモ

【4/2】ヤマブキ

【4/2】ポプラ

【4/2】ヤマザクラ

【3/25】アオキ

【4/16】オニグルミ

【3/18】サクラ(サトウニシキ?)

【3/18】ウグイスカグラ

【4/10】コナラ

【4/4】チョウショウインハタザクラ

(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	歴史・美術 (博物館)	原 浩史 (Hara)
	俳句	前北 馨 (Maekita)
	日本文化 (香道)	井之浦 茉里 (Inoura)
	日本文化 (茶道)	池田 卓也 (Ikeda)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	植物画・編集	荒巻 知子 (Aramaki)